平成三十一年度

一般入試② 問題（国語）

注意書き

・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
・この冊子には問題が一ページから二五ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
・解答はすべて解答用紙の枠（わく）の中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

新潟市に暮らす「私」（史織）は、アミたちとの関係がこじれて学校に行けない日が続いていた。中学二年生になる春休みに、「私」は関係の悪かった母親と離れ、父親と佐渡島へ引っ越す。そして、自宅を改装してカフェコーナーとブックコーナーが付いた小さな映画館を開いている「さっこちゃん」（父方の祖母）の家から島の中学校に通い始め、佐奈、まゆ、藤原さん（いちか）たちと出会った。藤原さんと次の土曜日に出かけることになった「私」が、そのことを佐奈とまゆに伝えると、彼女たちは藤原さんについて話し始めた。

「ねえ、なんでいちかが『廃墟』って呼ばれとるか知っとる？」
「六年の卒業文集って〝好きなこと〟とか書いたりするじゃん？　あの場所にさ」
佐奈とまゆが顔を見合わせてくすくすと笑った。
「廃墟＆スペイン語――って書いてあったの。ウケるでしょ」
「廃墟ってなんだよ、って感じ。自分が特別だとでも思ってんのかな」
「しかもさあ、なんでスペイン語なんだっつーの！」
佐奈がおかしさを隠しきれないという感じで、かん高い声を出す。
「頭はいいらしいけど空気読めんし」
まゆの言い方がどんどんキツくなる。
……うん。わかる。
藤原さんにイラッとするのも、悪口を言い出すと止まらないのも。
私だって、アミと仲の良かった時は、他の子の悪口を言ったことがある。
炭酸を飲んだ時に似ていた。ちょっとだけでやめようと思っても、甘くて、スカッとして、止められない。
「ねえ、土曜日の午後、部活休みだから、佐奈の誕生日会やろうって言ってるんだ。本当は来週の火曜日なんだけど、ちょっと早めにみんなでお祝いしようって」

まゆが私の両肩にポンと手を置いた。
えっ……土曜日は誘われてるって言ったよね？

1

……そうか。だから、誘ってるんだ。
まゆは誘ってくれただけなのに、真正面から強い風にあおられたみたいに息苦しくなった。
ここで「うん」って言わなきゃ、嵐はもっとひどくなるんだろう。
ここで「うん」って言わなきゃ、私はまた一人になってしまうかもしれない。

（　中　略　）

……簡単だ。
ここで、みんなに、合わせればいいんだ。
私が嫌われているわけじゃない。藤原さんが嫌われているんだから。
藤原さんのために、またひとりぼっちになるなんて、耐えられない。
心も体も空っぽになって、その中を乾いた砂が風に吹かれて通りすぎていって、砂すらもなくなって、ザラザラとした感触だけが残っているような、あんな気持ちにだけは、二度と、なりたくない。
「……うん、じゃあ、私も行っていい？」
言ってしまったあと、胃から何かがせり上がってくるような気がした。
母の意見に同意できないのに、無理やり「はい」と言わされた時と同じ、苦くて重いものが。
（大丈夫、大丈夫）
スカートに両手をこすりつける。
「やった！」
佐奈とまゆがハイタッチして、私もそれに加わった。
二人がはしゃぐ声がすぐそばで聞こえているのに、遠く感じた。
私は嵐をさけて、どこに行こうとしているんだろう？

そこは、本当に、安心できる場所なんだろうか？
わからないわからないわからない……。
OKの返事をしたのに、私の心の中で嵐はどんどんひどくなっていった。

2

帰宅するとすぐに、カフェコーナーをのぞいた。
さっこちゃんはおばさん二人組と、「人生フルーツ」のチラシを見ながら談笑していた。
まさか、また藤原さんが来てるってことはない……よね？

3

おそるおそるブックコーナーをのぞくと、すらりとした背中が見えた。
うわ、また来てる！
本当は、そのまま自分の部屋へ行きたい気分だった。でも、土曜日に行けなくなったと言わなきゃいけない。
「藤原さん」
思いきって声をかけると、藤原さんはゆっくりと顔を上げた。白い紙をはさみで切っている。
「何やってるの」
「サグラダファミリアのポップアップカード、私も作ってみたいと思って」
テーブルの上には、小さな白い紙片が散乱している。藤原さんの手元を見ると、カフェに飾ってあった立体カードとそっくりなサグラダファミリアが完成しつつあった。
「わ、すごい」
藤原さんはカードにメガネがくっつくんじゃないかと思うくらい顔を近づけると、はさみの先端を使って最後の仕上げをした。
「できたあ」

4

藤原さんは、小さい子がママに見せるみたいに、私にカードを広げてみせた。精巧なサグラダファミリアがゆっくりと立体的に浮かび上がってくる。

「わあ……」
小さな窓がいくつも細かくていねいに切り抜かれ、鋭い塔が何本も建っている。
「すごい……！　見本なしで作ったの？」
「うん。頭の中に、もうイメージはできてたから」
藤原さんは角度を変えながらカードを眺めて、頬を赤くした。
「サグラダファミリアって……スペインにあるんだよね？」
「うん。二〇二六年に完成する予定なんだって」
「えっ、まだできていないの？」
「うん……ガウディが亡くなってから百年後に完成予定なんだって……。でも、このカードは完成後をイメージして作ってみたんだ」
藤原さんはカードをうれしそうに眺めると、ふーっとため息をついた。
「ああ、完成する前にスペインに行って、本物を見てみたいなあ」
「えっ、完成する前がいいの？」
「造っている途中を見たいの。そして、完成した姿も……」
熱に浮かされたように早口で言う藤原さんの横顔は白く光って、なぜかきれいに見えた。
藤原さんが切った紙や厚紙を掃除すると、下からサグラダファミリアの本とノートが出てきた。
「サグラダファミリアって……まだできていないのに、廃墟みたいな感じもするね」
「うん。だから……好きなのかもしれない」
藤原さんがうなずきながら、ノートをさっと自分の方へ引き寄せた。
ノートの表紙には「español」と書いてあった。
「これ……もしかしてスペイン語？」

5

藤原さんの表情がさっと曇る。

――「なんでスペイン語なんだっつーの！」

はき捨てるような佐奈の言葉を思い出した。

「もしかして、そのノートでスペイン語、勉強してるの？」

「う、うん……。やっぱり少しは読み書きしたり、しゃべれるようになったりしてから行きたいって思って」

「すごい……」

「……勉強は嫌いじゃないけど……学校に行くと疲れる。古い建物を見たり、こういうのを作ったりしとる方が、私は、楽しい」

藤原さんの顔は学校にいる時と全然違って、輝いている。

「ノート、見せてもらっていい？」

（　中　略　）

「うわっ……」

全然きれいにまとめられてなんかいない。

蛍光ペンを引いたり、線で囲ったりもない。

ひたすら、スペイン語を書きなぐっている。ノートの裏に、うつるくらい。

でも、本当に、スペイン語を身につけたいと思っている気迫が伝わってくる。

私……こんなふうに勉強したこと、なかったな。

ただただ、テストの点数を取るためだけだった。志望校に合格するためだけの勉強だった。

藤原さんは、一人の時間を、前に進むことに、自分の夢のために使っているんだ。

私はひとりぼっちには耐えられないと思って、約束をやぶろうとしているのに。

6

（やっぱり……藤原さんとの約束を優先したい）

でもそう思っただけで、またぎゅっと胃が縮む気がした。

その夜、母から電話がかかってきた。

今度は夕食のあとすぐだったから、さっこちゃんが、「どうする？」と目で私に聞いてきた。

引っ越してからずっと、母からの電話には出なかった。

でも、今日は、なぜか声が聞きたい気がした。簡単に、答えをもらいたくなっている自分がいる。

（お母さん……やっぱり佐奈たちと仲良くしておいた方が、いいかな。佐渡の学校にも居場所がなくなったら、もうどこにも逃げられないし……）

さっこちゃんや父には、心配かけたくない。

佐渡に来てまで、こんなことで悩んでいるなんて。

小さいころは、小学校であったことはなんでも母に相談していた。

母に反発を覚えるようになってからも、すべてを母にさらけ出すのが義務のように感じ、やめることができなくなっていた。

返事ができないでいると、さっこちゃんが「ちょっと待ってくださいね」と、受話器を手でふさいで、もう一度私に視線を送ってきた。

7

（……だめだ。ここでお母さんとしゃべったら、また飲み込まれる）

私は力をこめて首を横にふると、逃げるようにリビングから出た。

ろうかを渡ると、さっこちゃんの声が小さくなっていく。

（さっこちゃん、ごめん）

どうして自分の母親なのに、電話にすら出られないのだろう。

なのに、一瞬、母の声に決断をゆだねてしまいそうになった弱い自分がいやになる。

さっこちゃんの声が聞こえなくなると、大きくため息をついた。

でも、まだ電話が続いていないか耳をすます。何も音がしないのを確認すると、ふーっと力が抜けた。

暗くなったブックコーナーの電気をつけた。

藤原さんの作ったサグラダファミリアのカードが、窓辺に飾られている。
手に取ると、藤原さんが紙を切っていた時のまっすぐなまなざしを思い出した。
藤原さんとしゃべっていると、学校にいた時に吹き荒れていた嵐がやんでいたことも。
ずっと心の奥からせり上がってきていたものが、ゆるゆるとおさまっていったことも。
一度、カードを閉じてまた開くと、白い教会がすっくと立ち上がった。
母と離れたからって、私は何も変わってない。母じゃなくても、声の大きい人に流されようとしているだけ。また、自分の気持ちにうそをつくの？
カードの中の教会は、うす暗い部屋で、白く、強く、まっすぐ立っている。
まるで藤原さんみたいだ。
自分にうそをつかなくていい。だれも、傷つけなくていい。
それって……気持ちいいのかな。藤原さん。
さみしくないのかな。
さっこちゃんが、部屋に入ってきてつぶやいた。
「今日は、藤原さん、ずっと熱心にそれを作っとったねえ」
「学校サボってここに来てたんだね」
私が言うと、さっこちゃんもカードを手に取って、ゆっくり見つめた。
「今の藤原さんは、ここで好きなことしとったらいいって思うな」
「学校に、行かなくても？」
さっこちゃんは塔の先端の十字架をそっとなでた。
「居場所は、どこでもいいと思う。外になければ、自分の中に作ればいい」
「自分の中？」
「そう。8 自分の心の中の居場所。何もかも忘れて熱中できたり、優しい気持ちになれたり、ほっとしたり、それから……」

「それから？」
「ちょっと強くなれる場所」
さっこちゃんもカードを閉じるとまた開いた。
「私もね、ずっと親の言いつけどおりに生きてきたんだ。本当は大学時代に映画館でずっとアルバイトをしとったし、映画の仕事がしたかった。でも、佐渡にもどって結婚しなさいって親の言うことを素直に守って、役場で働いて……。おじいちゃんに夢を語ったこともあったけど、本気にしてもらえんかったな……」
「さっこちゃんも……ずっとがまんしてたの？」
「私は、がまんしてたっていうより、それが当たり前だと思っとった。思い込もうとしとった」
さっこちゃんがカードを棚の上にもどした。
「でも、本当に好きなことって、だれが何を言っても、何年たっても、9 あきらめさせてくれんもんなんだよね……」
さっこちゃんが、いつもスクリーンのある場所を見た。
「映画も、この場所も、なくたってみんな生きていける。元気な時や、守られている時や、必要とされている時は」
私は小さくうなずく。
「でも、そうじゃない時にほっとひと息ついたり、自分を見つめたりできる場所になればいいな……と思って、ここを開いたんだ」
カードを見ながら、私は決心した。
（やっぱり、佐奈たちには、土曜日は行けないって言おう）

翌日、学校へ行くと佐奈たちが来る前に、伝えることを心の中で練習した。
新潟にいた時、アミにはちゃんと伝えられなかったけど、今度は。
朝練の終わった佐奈とまゆが教室に入ってきた。
思いきって立ち上がる。

「佐奈、まゆ、おはよう」
「あ、しおりん、おはよー」
「あの……土曜日のことなんだけど」
「ん？　誕生日会のこと？　あっ、そうだ。うちの場所、知らんかったよね？」
一瞬、佐奈の勢いに巻き込まれそうになる。
「う、ううん。それなんだけど、A やっぱり行けなくなって……」
じゃない。ちゃんと、言わなきゃ。
「先に約束してたから、B やっぱり藤原さんと出かけようと思って」
……言えた。
手に汗がにじむ。
佐奈の顔色が一瞬変わった気がした。まゆも「えっ」という感じで私を見つめた。
怖い。……でも、言うんだ。
「……せっかく誘ってくれたのに、ごめんね」
あのころは、自分を守ることだけで精一杯だった。でも、今はちゃんと言いたい。
「誘ってくれて、うれしかった。ありがとう」
思いきって言うと、佐奈はさっぱりと笑った。
「そっか～。まあ、いちかとの約束が先だったんだから、しょうがないね」
まゆが佐奈の顔色を見ながらこそっと言った。
「でもさ、今度からはいちかには気をつけなよ」
10 思わずうなずきそうになるのを抑えて、曖昧にほほえみ返した。

（高田由紀子『君だけのシネマ』）

㊟ 人生フルーツ＝さっこちゃんの映画館で上映する予定の映画の題名。
サグラダファミリア＝スペインにある、ガウディが設計した教会。
ポップアップカード＝紙を加工して作るカードで、開くとデザインしたものが立体的に飛び出すしかけになっている。

問一　――線部1「……そうか。だから、誘ってるんだ」とあるが、「私」は佐奈とまゆの誘いをどのように受け取ったのか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　藤原さんと「私」との出かける約束が大事なものであるとは思わず、佐奈の誕生日会の方が楽しいに違いないと考えて「私」を誘っている、と受け取った。
イ　藤原さんと「私」で出かける約束をしたが、「私」が気乗りしていないと思い、藤原さんと出かけずにすむように、佐奈の誕生日会という口実を作ってくれた、と受け取った。
ウ　藤原さんと「私」が出かける約束をするくらい仲がいいのをうらやんでおり、佐奈の誕生日会に「私」を呼ぶことで「私」を仲間に引き入れようとしている、と受け取った。
エ　藤原さんと「私」とのあいだに出かける約束があることを知った上で、佐奈の誕生日会に誘って「私」が来るかどうかを試そうとしている、と受け取った。

問二　――線部**2**「私の心の中で嵐はどんどんひどくなっていった」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　佐奈たちは表面的には仲良くしてくれるものの、対等の関係ではなく、佐奈たちにひたすら従うような関係しか築けない自分に対して今までにない強い嫌悪（けんお）を感じているということ。

イ　佐奈たちは表面的には仲良くしてくれるものの、実は佐奈たちは自分のことを友だちだと思っていないことがはっきりわかり、悲しい気持ちが強くなる一方であるということ。

ウ　佐奈たちに友だちとして迎（むか）え入れられたものの、友だちとして良い関係が築けるか自信がもてず、この先どうなってしまうのか、不安が強くなってきているということ。

エ　佐奈たちに友だちとして迎え入れられたものの、結局佐奈たちと藤原さんのどちらと仲良くすればよいのかわからず、とまどう気持ちが強くなってきているということ。

問三　――線部**3**「まさか、また藤原さんが来てるってことはない……よね？」とあるが、「私」が藤原さんを避けようとするのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　藤原さんは「私」と一緒に出かける気でいてくれるのに、「私」は藤原さんとの約束を果たせなくなってしまい、そのことが気まずかったから。

イ　藤原さんは「私」と仲良くなりたいと思って祖母の映画館にやって来るのに、「私」は藤原さんと仲良くなれそうもないと感じていたから。

ウ　藤原さんは毎日ブックコーナーに来て一人で何かをしているのだが、「私」にはその行動の目的が理解できず、不思議な人だと思っていたから。

エ　藤原さんは佐奈たちとうまくいっていないのに、「私」はすでに彼女たちとわかり合えており、藤原さんを裏切っているようでうしろめたかったから。

問四　――線部**4**「藤原さんは、小さい子がママに見せるみたいに、私にカードを広げてみせた」とあるが、ここから藤原さんのどのような性格がうかがえるか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　相手の反感も気にせず、自分のその時の気持ちをありのままに表現する性格。

イ　親しみを持った相手に対して、無防備なまでに自分から心を開く性格。

ウ　自分に自信があり、小さなことでも人にほめてもらおうとする性格。

エ　本心をあからさまに見せるのではなく、だれに対しても控（ひか）えめにふるまう性格。

問五　――線部**5**「藤原さんの表情がさっと曇る。」〜佐奈の言葉を思い出した」とあるが、この時の「私」は藤原さんの心情をどのように読み取ったと考えられるか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　藤原さんは、スペイン語を学んでいることを佐奈たちに馬鹿（ばか）にされたことがあるらしく、その悲しみから立ちなおれず、前向きな気持ちになれないでいる。

イ　藤原さんは、スペイン語を学んでいることを佐奈たちに馬鹿にされたことがあるらしく、友だちのことも一切信じられなくなっている。

ウ　藤原さんは、スペイン語を学んでいることを佐奈たちに馬鹿にされたことがあるらしく、そのことが忘れられずに、今でも気にしている。

エ　藤原さんは、スペイン語を学んでいることを佐奈たちに馬鹿にされたことがあるらしいが、それでもかまわないと開きなおっている。

問六　――線部**6**「（やっぱり……藤原さんとの約束を優先したい）〜ぎゅっと胃が縮む気がした」とあるが、「私」がこのように感じるのはなぜか。その理由を一〇〇字以上、一二〇字以内で説明しなさい。

問七　――線部**7**「私は力をこめて首を横にふると、逃げるようにリビングから出た」とあるが、「私」がこのような行動を取ったのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の悩みを母に相談したいという心の弱さに負けてしまったら、これまで通り何でも母に決めてもらう関係のままになってしまうと感じ、母に頼る気持ちを何とかしてふりはらわなければならないと思ったから。

イ　自分の悩みを母に打ち明けたいという気持ちに流されてしまったら、佐渡に来ても友だちとうまく付き合えていないことが父や祖母にまで伝わってしまうと思い、そのことで二人に心配をかけるのをどうにかして避けたいと考えたから。

ウ　自分の悩みを母に聞いてもらいたいという甘えた気持ちになってしまったら、離れていても電話をかけてきて何でも決めようとする母の言いなりになってしまうように思い、怖くてその場に居続けることができなくなったから。

エ　自分の悩みを母に解決してもらおうという人まかせの気持ちになってしまったら、母に頼るまいとして祖母と一緒に努力してきたことが無駄になってしまうように感じ、支えてくれる祖母に対して申し訳なく思ったから。

問八　――線部**8**「自分の心の中の居場所」とは、どういう場所なのか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　親の期待や友だちの意向からひとまず距離を置けて、自分と周囲の人との関係を優しい気持ちで見なおすことで、新たな関係を作れる場所。

イ　未来の自分の姿や夢をはっきりと思い描くことができ、その姿や夢に向かってすべてを忘れて熱中して取り組むことのできる場所。

ウ　自分の本当に好きなものだけに囲まれてひと息つけ、世間で正しいとされるあり方をこばむことで、自由でいられる場所。

エ　生きていくのにつらさを感じるような時でも、安心できたり自身の内面を見つめなおしたりできて、元気を取り戻せる場所。

問九　――線部**9**「あきらめさせてくれんもんなんだよね……」とあるが、この言葉から、さっこちゃんは自身の行為をどのようにとらえていると考えられるか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　映画館を開く夢が強く心に残り続け、そこに向けて挑戦することをやめられず、無謀にも実現させて余計な苦労を背負ってここまで来てしまったことを、今はしぶしぶながら受け入れている。

イ　映画館を開くという心の中であたため続けた計画を、夫など身近な人間にさえ相手にされず、自分でもあきらめかけもしたが、もともとの信念を貫いてついに実現させた達成感を改めてかみしめている。

ウ　自分の奥底にある、映画館を開きたいという強い思いは、時間の経過や他人の言葉、さらには自分自身の心の迷いによってくじけそうになっても、消えたりしなかったことをしみじみとふり返っている。

エ　映画館を開きたいという願望といさぎよくあきらめようという思いがずっと心の中にあり、自分がその願望と断念の板ばさみになって苦しみ続けてきたことを思い返している。

問十　〜〜〜線部**A**「やっぱり行けなくなって……」、〜〜〜線部**B**「やっぱり藤原さんと出かけようと思って」とあるが、Aの言葉からBの言葉に「私」が言い直したのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　Aの言葉では仕方のない事情で佐奈の誕生日会に行けなくなった印象になるが、Bの言葉では自分の意志に基づいて、佐奈たちの所に行かないと決めたことを示せるから。

イ　Aの言葉では本当は佐奈たちの所に行きたいのに行けない印象になるが、Bの言葉では佐奈の誕生日会に行きたくないと考えていることがはっきりと示せるから。

ウ　Aの言葉では佐奈の誕生日会へ行きたくない意志が表されている印象になるが、Bの言葉では行かないのはわざとではなく仕方のない事情であることを示せるから。

エ　Aの言葉では佐奈たちの所に行きたくない意志を遠回しに示している印象になるが、Bの言葉では佐奈の誕生日会に出席したくないという意志をはっきり示せるから。

問十一　――線部**10**「思わずうなずきそうになるのを抑えて、曖昧にほほえみ返した」とあるが、まゆの言葉に「私」がこのように応じたのはなぜか。その理由を八〇字以上、一〇〇字以内で説明しなさい。

問十二　この文章の中で、藤原さんが作った「サグラダファミリア」の立体カードはいろいろな役割を果たしていると考えられる。その説明として**まちがっているもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

ア　サグラダファミリアのカードは、悩んでいる「私」に一歩前へ踏み出す勇気をあたえ、今後の生き方について考えるきっかけをもたらし、「私」をみちびくような役割を果たしている。

イ　サグラダファミリアのカードには、スペインに行ってサグラダファミリアを直接見たいという藤原さんの思いがこめられており、藤原さんの夢を追い求めるひたむきな姿を印象づける役割を果たしている。

ウ　サグラダファミリアのカードには、壮大な教会を設計し、その完成を見ずに亡くなったガウディの生き方が表れており、死ぬまでに完成するかどうかを問題とせず、自分の信じた道を突き進むことの大切さを示す役割を果たしている。

エ　サグラダファミリアのカードは、さっこちゃんがそれをそっとなでる様子に表れているように、さっこちゃんが藤原さんの夢を、映画館を作るという自身の夢と重ね合わせつつ、優しく応援していることを示す役割を果たしている。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

あるときエチオピア南部の小さな町で買い物をしていると、こぎれいな格好をした青年に英語で話しかけられた。彼はニコニコしながら、流ちょうな英語でずっとなにかを話しかけてくる。だが、まるで意味がつかめない。その笑顔もどこかゆがんでいて、なにを考えているのか、読みとれない。

どうしたものかと戸惑って立ち往生していると、通りすがりの人が、そっと彼の手を引いて、「おいで」と連れていく。彼も笑顔のまま手を振りながら、離れていった。

エチオピアの田舎には、精神を病んだ人が入院できる医療施設などない。文字どおり、町のなかで「ふつう」に生きている。町の人も、そういう人のことをよくわかっていて、ときに笑いものにしながらも、ちゃんと関わり合いながら暮らしている。

調査をしてきた村にも、ちょっとおかしな振る舞いをするアブドという名の青年がいた。頭にオレンジ色の紐を巻きつけ、長い木の枝を手に、ぶつぶつとつぶやきながら、ふらっと人の家に入ってくる。**1**みんな心得たもので、大きな声で「元気にしてるか？」と声をかけたり、「食べていきな」と、食事を出してあげたりする。

あるとき、アブドが隣村の家に火をつけて全焼させてしまった。それでも捕まえられるわけでもなく、村のなかを歩きまわり、他人の家に居候しながら、同じような暮らしを続けていた。みんな彼が問題を抱えていることを知ったうえで、寛容な態度をとっていた。

数年後、村の畑で収穫作業に立ち会っていたときのことだ。刈りとったトウモロコシを袋詰めする若者たちのなかに、見たことのある男がいた。表情も落ち着いて、すっかり見違えている。ちらっとこちらを見上げると、ばつが悪そうに目をそらし、寡黙に作業を続ける。「あのアブド？」と、隣にいた友人に目配せすると、「よくなったんだ」と微笑む。畑作業などを手伝いながら、自活しはじめたようだ。

他にも精神的におかしくなったり、またもとに戻ったりした村人が何人もいる。人の心は、ときに異変をきたす。そのときは、そのときなりに隣人としての関わり方がある。エチオピアの人びとは、それを日常のこととして経験している。

もちろん、それは生やさしいことではない。私の親しい村の友人も、一時、精神的に「おかしく」なり、家族に暴力をふるいはじめた。困りはてた親族の者がワイヤーで手足を縛り、その鬱血がもとで彼は病院で右手を切断した。一連の経緯を村人たちは、みんな知っている。ああだこうだと意見をぶつけ合いながら、誰もがその出来事のトウジシャであり続けていた。

日本に生きるぼくらは、どうか。精神に「異常」をきたした人は、家族や病院、施設に押しつけられ、多くの人が日常生活で関わる必要のない場所にいる。どこかで見かけたとしても、「見なかった／いなかったこと」にしている。あるいは、どうしたらいいかわからずに立ち往生する。

数年前に大阪の地下鉄の駅で見かけた小柄な老婆の姿が目に焼きついている。きちんと身だしなみを整えたその女性は、にぎやかな人並みに背を向け、小さな布の上で、ひとり壁に向かって正座したまま、じっとしていた。あの女性が社会から孤立しているのは、たぶん彼女だけの選択の結果ではない。私も含め、彼女の姿を視線の隅でとらえながらも、「関わらない」という選択をした多くの人びとが、おそらくは、その現実を一緒になってつくりだしている。

そうして他者と関わらないことで、「ふつう」の人間像、「ふつう」の世界の姿が維持される。ぼくらが、いつもそこにあると信じて疑わない「ふつう」の世界は、じつは傍らにいる他者によって、つねにその足もとを揺さぶられている。この本が目指す「構築人類学」は、その揺さぶりに寄りそって、別の世界の姿を考える。

構築主義という考え方がある。何事も最初から本質的な性質を備えているわけではなく、さまざまな作用のなかでそう構築されてきた、と考える視点だ。よくあげられる例は、「ジェンダー」だろう。男性は生まれたときから「男らしさ」をもっているわけではない。社会の制度や習慣などによって「男らしさ」を身につけてきた。だから「男らしさ」は社会的に構築されてきた。そう考える。

この考え方は人類学だけでなく、社会学など人文社会科学では、もはやジョウシキになっている。構築されているのは、「男性」や「日本人」といった社会集団の性質だけにとどまらない。

昔は「ストレス」という言葉はなかった。ところが、いま「ストレス」という語句を使わずに、「あのいやな感じ」を説明することはできない。「ストレス」という言葉が一般化したことで、人の感覚すらも構築されてしまう。ある言葉や概念

が、ぼくらがずっとそこにあると信じて疑わない「現実」さえもつくりだす。「児童虐待」や「ストーカー」だって、昔はなかった概念が生まれたことで、はじめて社会問題として構築されてきた。

こうした構築主義の視点は、既存の秩序や体制を批判するとき、とても有効だった。ジェンダーだったら、性差別を批判し、性差にもとづいた社会制度（婚姻制度や就業慣行など）に正当性がないと主張する有力な武器となった。構築主義が批判理論のひとつとされるのは、そのためだ。

（　中　略　）

いろんな現象の構築性を批判するのはいい。でも批判のあとには、どこか虚しさが残る。男らしさも、日本人らしさも、社会的に、歴史的に、構築されてきたのはわかった。あらたな概念がつくられると、ぼくらの感覚や物の見方もがらっと変わってしまう。それもいい。で、じゃあどうしたらいいの？　そんな疑問が浮かぶ。

物事の構築性をふまえたうえで、なにをどう変えていけばいいのか。この本では、その問いから考えていこうと思う。

構築主義には、視点を転換する力がある。でも、その核心は「批判」そのものにはない。もっと別のところに可能性があるのではないか。

いまここにある現象やモノがなにかに構築されている。だとしたら、ぼくらはそれをもう一度、いまとは違う別の姿につくりかえることができる。そこに希望が芽生える。その希望が「構築人類学」の鍵となる。

いまの世の中にどこか息苦しさを感じたり、違和感を覚えたりしている人にとって、最初から身の回りのことがすべて本質的にこうだと決まっていたら、どうすることもできない。でもそれが構築されているのであれば、また構築しなおすことが可能だ。

ではどうやって別のものに再構築できるのか？

（　中　略　）

もちろん簡単に答えは出ない。だから最初に、ぼくら一人ひとりがいま生きている現実を構築する作業にどう関与しているのか、その関わり方を探ることからはじめよう。そこで手がかりになるのが、人と人とがモノや行為をやりとりする「コミュニケーション」だ。

一九二五年に発表されたマルセル・モースの『贈与論』(注)は、人類学の可能性を世に知らしめた古典的メイチョだ。これまで多くの人類学者が、繰り返し『贈与論』に立ち返って研究を深めてきた。

モースは、まず次のような問いを立てる。ミカイ社会では、どんなキソクが受けとった贈り物への返礼を義務づけているのか。贈られた物に潜むどんな力が、受けとった人に返礼をさせるのか。

古くから多くの社会で、交換や契約は贈り物のかたちで行われてきた。表面的には自由意志にもとづきながらも、実際には義務として与えられ、返礼されている。モースは、この「義務」の生成に注目して、現代にもつながる道徳と経済との関わりを考えようとした。そこには、自己利益の計算だけに終始する世界が出現しつつあることへの危機感があった。

モースは、贈与が法や経済、宗教や美など、社会システム全体に関わる現象だと考えた。本書も、この考え方にならおうと思う。贈与的な行為を、正反対の行為だとされる「商品交換」や「市場」、そして政治の制度である「国家」との関係のなかに位置づけてみる。他者とのモノや行為のやりとりが社会／世界を構築する作業であることを確認しながら、そのどこをどう動かせば変えることができるのか、その手がかりを探したいと思う。

モースは、贈与にはさまざまな側面があると指摘した。それはかならずしも慈愛に満ちた行為とはかぎらない。返礼の義務があるなかで、返せないほどの贈り物を渡して、相手の名誉を傷つけ、従属させる「ポトラッチ」という儀礼もある。でも、たとえ支配と従属であっても、そこには人と人とをつなぐ「関係」ができる。これが贈与の力だ。

モースは言う。「贈り物というのは、与えなくてはならないものであり、受けとらなくてはならないものであり、しかもそうでありながら、もらうと危険なものなのである。それというのも、与えられる物それ自体が双方的なつながりをつくりだすからであり、このつながりは取り消すことができないからである」(『贈与論』岩波文庫、三六九頁)。贈与は怖い。でも、世の中のバランスを取り戻すには、おそらく、この贈与の力がいる。

4

世界は、分断されている。

「知らない」とか、「関係ない」とか、「敵だから」とか、いろんな認識の壁で分断されている。この関係の断絶は、ぼくらの倫理性を麻痺させる。人を殺すことだって、人が殺されているのを無視することだって、できてしまう。だからこそ、他者に向き合い、その姿にみずからを映しながら、いろんな「つながり」を回復する必要がある。

必要なのは、市民が自分自身について、他者について、社会的現実について、鋭敏な感覚をもつことだ。モースはそう書いている。でも、どうやったらその「鋭敏な感覚」をもてるのか。その「感覚」は「贈与」とどう関係しているのか。それが本書の問いのひとつだ。

モースは言う。私たちの生活は、いまだに贈与と義務と自由とが混ざり合った雰囲気のなかにとどまっている。物には情緒的な価値が備わっていて、貨幣価値に換算される価値だけがあるわけではない、と。たぶん、それは現代の日本でも変わらない。

グローバル市場が席巻(注)したようにみえる世界でも、贈与がもつ「つなぐ」力は消えたわけではない。それは、「つながり」を失わせる力との拮抗(注)のなかで、いまもぼくらの世界をつくりだしている。

5

（松村圭一郎『うしろめたさの人類学』）

(注) 贈与論＝相手から贈り物を受け取ったり、世話になったりすると、自分だけが利益を得ることをうしろめたく感じて、相手にお礼の品を返そうとする、人間の営みに関する考察。

席巻＝激しい勢いで勢力範囲を広げること。

拮抗＝互いに同じくらいの力で張り合っていること。

問一　═══線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　～～～線部A・Bの本文中の意味として適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A　立ち往生

ア　状況を打開するために行ったり来たりすること
イ　左にも右にも移動できず、身動きがとれなくなること
ウ　物事が行きづまりの状態になって対応にこまること
エ　応対の仕方に迷った結果、取り乱してしまうこと

B　ばつが悪そうに

ア　その場を取りつくろえず、気まずい様子で
イ　その状況に興味がもてず、無関心な様子で
ウ　気にくわず、反感を抱いている様子で
エ　自分の行いに対し、責任を取りたくない様子で

問三　――線部**1**「みんな心得たもので、大きな声で『元気にしてるか？』と声をかけたり、『食べていきな』と、食事を出してあげたりする」とあるが、エチオピアの人びとが、「おかしな振る舞いをする」人にこのように接するのはなぜだと考えられるか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　おかしな振る舞いをする人を必要以上に恐れたり、面倒だと思って避けたりせずに、みんなで関わり続けていけば必ずよくなるということがわかっているから。
イ　おかしな振る舞いをする人に攻撃されたり、からまれたりしないようにするために、ふだんから機嫌をとって少しでも関係をよくしておいた方がよいと思っているから。
ウ　おかしな振る舞いをする人になる可能性は誰にでもあり、元に戻る場合もあることを経験的に知っていて、隣人として関わり続けていくものだと思っているから。
エ　おかしな振る舞いをする人が迷惑をかけても、それは本人のせいではなく病気のせいなので、隣人として病気になる以前の関わり方を続けるのが当たり前だから。

問四　――線部**2**「『ふつう』の世界は、じつは傍らにいる他者によって、つねにその足もとを揺さぶられている」とあるが、このことを説明した次の文の空らんを補う言葉として適当なものを、後の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

異質な他者と関わらないことで保たれる、「ふつう」と信じられている世界は、周りにいながら見なかったことにしている、異質な他者の存在を通じて、（　　）。

ア　すべての人が平等にあつかわれる公平な社会が築けるかどうかを、試され続けているということ
イ　一部の人を無視するような姿勢が許されるのかどうかを、ふだんから追及されているということ
ウ　「ふつう」とそうでない物事を区別することの無意味さを、つねに突きつけられているということ
エ　そういう世界のあり方が本当に当たり前なのかどうかを、いつも問いなおされているということ

問五　――線部3「こうした構築主義の視点」とあるが、それはどのような考え方か。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　物事の性質はさまざまな作用によってつくり上げられており、社会集団の性質や社会問題を論じる際には、そのさまざまな作用に注目すべきだという考え方。

イ　物事の性質はもともと決まっているとは限らず、社会の習慣によって、また新しい言葉が定着することによって、その多くはつくりだされるものだという考え方。

ウ　物事の性質は、社会の制度や言葉によってどうにでも変化するので、どういう制度をつくるか、どういう言葉を社会に広めるか、注意深くあるべきだという考え方。

エ　物事の性質は、言葉や習慣によってどのようにつくりだされたのかを解明していけば、それが今後どう変化していくのかを予測できるものだという考え方。

問六　――線部4「世の中のバランスを取り戻すには、おそらく、この贈与の力がいる」とあるが、そう言えるのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　他人と関わろうとしない人が増えたことで分断されてしまった世界を修復するには、贈与というモノや行為のやりとりによって、人と人をつなぎ直すことが必要だから。

イ　隣人との関係を軽視する人が増えたことで分断されてしまった世界を修復するには、贈与のもつ相手を従わせる力によって、人びとを地域の課題に関わらせることが必要だから。

ウ　他人との関わりを避ける人が増えたことで分断されてしまった世界を修復するには、贈与というお互いを思いやる営みによって、人びとに鋭敏な感覚を身につけさせることが必要だから。

エ　社会と関わろうとしない人が増えたことで分断されてしまった世界を修復するには、贈与という見返りを求めない行為によって、相手の気持ちを変えることが必要だから。

問七　――線部5「『つながり』を失わせる力」とあるが、その力が強まることによって、人びとはどういう状態になると考えられるか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　親しくない相手や見ず知らずの他人に気をつかってつながり続けるよりも、お金をはらうことでそれに見合ったサービスを受けて物事を済ませたい誘惑に、人びとの多くがとらえられた状態。

イ　よく知らない相手に対し自分とは無関係だと考えることで、たとえその人が苦しんでいるのを見ても助けてあげたいと思わないような、道徳観が働かないあり方が、人びとのあいだに広がった状態。

ウ　他人や社会との元からある関係を保つ意欲さえも弱まってきており、重要でもない人間関係をわざわざ新しく作ることなどなおさら面倒だという心理が、人びとのあいだで共有された状態。

エ　他人と距離をつめて向き合い、よりよい関係を作ろうとしながらも、そこから上下の関係が生じがちであることにやがて疲れ、人びとの多くが他人に無関心になった状態。

問八　本文の内容・表現・論理展開の説明として**まちがっているもの**を、次の中から**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア　大阪の地下鉄の駅で壁に向かって正座し続ける老婆がいたことについて、筆者は彼女と関わろうとしない周りの人々もその状況をつくりだすことに手を貸していると述べている。

イ　筆者は「ストレス」という言葉を例としてあげながら、新しい言葉が導入されることによって、それまで明確にはとらえにくかった不快な感覚がはっきり意識できるようになることを示して、構築主義を説明している。

ウ　筆者は、世の中の秩序や制度によって苦しい立場に置かれている人びとのために構築主義は存在しており、構築主義の立場から現実を見つめ直して、世の中に対する批判の声を上げなければならないと主張している。

エ　筆者はモースの『贈与論』に基づきながら、現代の人間関係をめぐる問題の解決に向けて「贈与」という行為に注目し、また『贈与論』にある「鋭敏な感覚」という言葉を取り上げ、そのような感覚をもつことの重要性にふれている。

オ　エチオピアや大阪の、精神的に「異常」をきたした人と社会との関わり合いについて取り上げた上で、構築主義や贈与論の考え方を手がかりにして、現代社会の今後のあるべき姿について、その道筋をさぐっている。

カ　エチオピアの話は、人と人がつながっている具体例として、大阪の話は、人間関係から物を贈り合う習慣が失われた具体例として提示されており、その後の構築主義や贈与論に関する議論をわかりやすいものにしている。

平成三十一年度　一般入試②　国語解答用紙（1）

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

	解答用紙2

合計

一

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

100

平成三十一年度　一般入試②　国語解答用紙（2）

受験番号

氏名

小計

①
②
③
④
⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

問十一

80

問十二

二

問一

a

b

c

d

e

問二

A

B

問三

問四

問五

問六

問七

問八

平成三十一年度　一般入試②　国語解答用紙（1）

受験番号

氏名

①	
②	
③	
④	
⑤	

◆右のらんには何も書かないこと。

解答用紙2

合計

問一	問二	問三	問四	問五
エ	ウ	ア	イ	ウ

問六					
ひとりぼっちになることをおそれず、自分の	好きなことに向かって一心に進もうとしている	藤原さんの姿に魅力を感じ、また藤原さん	との約束が先だったこともあり、その約束を	守りたいと思う一方で、佐奈たちに嫌われ仲	間はずれにされることをおそれているから。

100

問七	問八	問九
ア	エ	ウ

問十
ア

平成三十一年度　一般入試②　国語解答用紙（2）

①	
②	
③	
④	
⑤	

◆右のらんには何も書かないこと。

受験番号

氏名

小計

問十一	
藤原さんを否定するまゆの言葉につい同意しそうになったが、藤原さんと仲良くしたいという自分の気持ちに従って思い止まったものの、その気持ちをまゆ達に伝えて対立する勇気はなく、笑ってごまかそうと思ったから。	80

問十二
ウ

二

問一	
a	当事者
b	常識
c	名著
d	未開
e	規則

問二	
A	ウ
B	ア

問三	
ウ	

問四	
エ	

問五	
イ	

問六	
ア	

問七	
イ	

問八	
ウ	
カ	

（順不同）